

京都産業大学 ことばの科学研究センター

2021 年度 第 4 回研究会

テキスト言語学の観点からのロシア語動詞と副動詞の アспектに関する通時的研究

～19 世紀から 20 世紀の文学作品を資料として～

北上 光志

(ことばの科学研究センター 研究センター員・外国語学部教授)

従来のアспектに関するテキスト研究は単語の意味に基づく分析方法が中心であり、あいまいな点が多い。本発表では客観的に形に現れた分析基準を提案して、ロシア語で書かれた 19 世紀から 20 世紀の文学作品で用いられている動詞と副動詞を分析し、アспектの使い分けが時代とともにどのように変化してきたかを明らかにする。

小説の中で発話文が出てくるところは物語の山場になる頻度が高く、また言語学的に「前景 (foreground)」の要因を多く持つ (Kitajo (2015 他))。このことに関連し、本発表は「発話文からの距離」を基準にして、動詞と副動詞のアспект(完了体、不完了体)分布が、前景とどのような位置関係になっているかを分析する。発話文からの距離を 3 つ(a)直接話法構文、b)直接話法構文の直前直後文、c)直接話法構文から 2 文以上離れた文)に分け、a)と b)が「前景に近い位置」、c)が「前景から遠い位置」と規定する。この 3 区分で用いられている動詞と副動詞の使用頻度をアспектの違い(完了体、不完了体)を考慮しながらカウントすることにより、200 年間に書かれた小説をぶれることなく分析することができる。

分析資料は、19 世紀から 20 世紀を 50 年ごとに 4 区分し、時代を代表する 16 人の作家の作品で使用されたすべての動詞と副動詞を分析する。分析した動詞は総数 34503 例(完了体:19179 例、不完了体:15324 例)、副動詞は総数 6870 例(完了体:2640 例、不完了体:4230 例)である。分析した結果をもとに、これまで明らかにされていなかったテキスト機能面でのアспектの歴史的変動の全貌を時代背景も踏まえてダイナミックに解明する。

10 月 20 日 (水曜日)

15 時 30 分開始 17 時 30 分終了

第二研究室棟会議室・Teams によるオンライン開催

オンラインによる参加の場合のみ、下記へメールでお伝えください。

center-lg-studies@cc.kyoto-su.ac.jp (ことばの科学研究センター)